自閉症児はどのように「自発的に顔を見る」か？
When do children with ASD spontaneously look at the face?
○松田壮一郎・山本淳一
(慶應義塾大学社会学研究科/日本学術振興会) (慶應義塾大学文学部)
Soichiro Matsuda, Jun-ichi Yamamoto
(Keio University, the Japan Society for the Promotion of Science) (Keio University)
Key words: autism, spontaneous face-locating, smiling

問題と目的
これまで、自閉症スペクトラム障害児の社会的相互作用を改善させる試みとして、表情の模倣や、セラピストの言語行動に対する共感の応答に、発動形成共同連絡面での笑顔表示の指標行動とする介入研究が行われてきた。これらの介入研究では、明確な先行刺激に対する条件性応答として、社会的行動を定義し訓練を行っている。しかし、日常連絡面では、上記の介入研究における訓練面のように、明確な先行刺激が存在することは少ない。そこで、「見ている」という言語表示が無い場合であっても、「なにか顔に注意を向ける」とか、他の表情、表情を前部刺激とする学習に必要である。そこで、本研究では、「自発的に顔を見る」行動の成立条件について検討を行った。

方法
研究参加児：本研究には、5歳5か月の広範性発達障害男児1名が参加した。発達年齢の算出には、新版K-ABC発達検査2001を用いた。総合発達年齢は5歳5か月だった。

セッション：セッションは大学内の実験室で行った。10分を1セッションとし、およそ週1回、1日平均2セッション（range: 1-4 sessions）実施した。ベースライン期には5-6分のおおよそを用い、介入期、ブロール期にはベースライン期と同一のものや5分を用いた。

手続き：実験デザインにはB-Aデザインを用いた。

ベースライン評価：ベースラインのセッション中、参加児は実験者と自由に遊んだ。10分を1セッションとし、およそ週1回、1日平均2セッション（range: 1-4 sessions）実施した。ベースライン期には5-6分のおおよそを用い、介入期、ブロール期にはベースライン期と同一のものや5分を用いた。

介入：介入期のセッション中、以下の手続きを挿入した。
①時間延長：参加児が発表した言語行動や働きかけに対して、実験者がフィードバックするまでの時間を延長させた。
②逆移動：言語行動を含む、参加児の行動を、実験者が模倣した。
③身体接触：参加児の働きかけや、アイシートに基づいて、くずぐりを行った。
④「変な行動」：セッション中に突然実験者が大声を出す、声を上げる、ホワイトボードに頭を倚せる、色を変え、体をくねらせるなどの「変な行動」を行い。

プローブ評価：ベースライン評価と同様だった。

結果と考察
ベースライン期、介入期、ブロール期における参加児の「顔を見る行動」、「笑う行動」、「顔を見ながら笑う行動」の生起率を図1に示した。

図1．「顔を見る」、「笑う」、「顔を見ながら笑う」生起率の推移

ベースライン期「顔を見る行動」の平均生起率は19.8%（SD = 9.2）、「笑う行動」は16.1%（SD = 13.5）、「顔を見ながら笑う行動」は53.2%（SD = 3.4）だった。

介入期「顔を見る行動」の平均生起率は76.8%（SD = 13.4）、「笑う行動」は51.5%（SD = 11.6）、「顔を見ながら笑う行動」は28.2%（SD = 10.1）だった。

ブロール期「顔を見る行動」の平均生起率は38.6%（SD = 14.1）、「笑う行動」は18.6%（SD = 17.9）、「顔を見ながら笑う行動」は26.1%（SD = 5.9）だった。

結果、本研究の介入パッケージにより、「顔を見る行動」の平均生起率がベースライン期に比べ、介入期で3倍以上、ブロール期で1.5倍以上増加することが示された。一方で、「笑う行動」「顔を見ながら笑う行動」は、介入期でそれぞれベースライン期の3倍以上、8倍以上の増加が認められたが、ブロール期では増加が認められなかった。

本研究により、「自発的に顔を見る」行動の成立における必要条件が明らかになった。今後は制御変数の同定を行い、必要十分条件を明らかにすることが求められる。

引用文献